

ガラテヤ人への手紙1章11-24節 「人間によらない福音」パート②

1A 神による使徒職 1-10

1B 父なる神とキリストの恵み 1-5

2B ほかの福音 6-10

2A イエス・キリストの啓示 11-24

1B パウロの宣べ伝えた福音 11-12

2B ユダヤ教に進んだ者への恵み 13-17

3B 使徒たちに会わなかった訪問 18-24

本文

ガラテヤ人へ手紙1章の後半です。前回、1節から10節まで見ましたが、これから11節から1章の最後までを見ていきたいと思います。今、ガラテヤ地方の諸教会に、ユダヤ主義者と呼ばれる偽教師たちが入り込んでいます。パウロが建てあげたこれらの教会の中に入って、パウロの信用を貶めました。彼を貶めながら、自分たちに引き寄せるために、偽りの福音を教えていたのです。それは、「パウロが教えているような、イエスを信じて救われる、ということではないのだ。イエスを信じるだけでは足りないのだ。割礼を受けて、モーセの律法を守って、ユダヤ教徒になって、初めて神の国に入れるのだ。」としたのです。すでに割礼を受けて、律法も守っているユダヤ人たちがイエスをメシアと信じるのと同じように、異邦人もユダヤ教に改宗して、イエスを信じるようにしないとイケないとしたのです。ユダヤ人のようになることを強いたので、ユダヤ主義者と呼ばれます。

2A イエス・キリストの啓示 11-24

それでパウロがこの1章で語っているのは、「この福音は、人によるのではない」というものです。ユダヤ主義者は、自分たちがエルサレムから来ている。エルサレムの使徒たちからの教えなのだ、として、その教えが人からのものなのだということが前提になっています。先祖からの言い伝えをユダヤ教徒が守って来たように、人からの教えを教えとして信じるのが大事だとしていました。しかし、そもそも、福音は神の福音であり、神からのものです。そして、私たち一人ひとりも、使徒たちの教えを受け入れているのですが、御霊によって、直接、福音の真理が示されるのです。このことを後半でも、語っています。

1B パウロの宣べ伝えた福音 11-12

¹¹ 兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。¹² 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

ユダヤ主義者らは、パウロの信頼を信者たちの中で引き落とすために、次のようなことを言っていました。「彼は、十二使徒たちから福音を聞いたが、彼は未熟者だ。にもかかわらず、このようにあなたがたに伝えてきたのだ。イエス・キリストを信じるだけで救われるというのは、まだ幼い考えだ。私たちが教えるように、ユダヤ人のようにならないと本当には救われないのだ。」そこで、パウロは事実をはっきりと明らかにして、自分の伝えている福音が、神のものであり、イエス・キリストの直接の啓示なのだということを明らかにしています。確かに、パウロは三日目によみがえられたイエス様を見ていません。けれども、全く同じように、復活のイエス様が現れてくださっています。使徒の働き 9 章 1-9 節を読んでみましょう。

1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、2 ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。3 ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」5 彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。6 立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。」7 同行していた人たちは、声は聞こえてもだれも見えないので、ものも言えずに立っていた。8 サウロは地面から立ち上がった。しかし、目を開けていたものの、何も見えなかった。それで人々は彼の手を引いて、ダマスコに連れて行った。9 彼は三日間、目が見えず、食べることも飲むこともしなかった。

今であっても、福音が「人間によるもの」によるという話が巷ではあります。私が、宣教地にいた時に、政府が発行した英語の本で、イエス・キリストの生涯を描いたものがありました。かなり露骨で衝撃的でした。Jesus died.で終わっていたのです！イエスは死んだとして、終わっていたのです。おい、福音書を見たらすべてが復活で終わっています。それから、キリスト者の最も大事な年間行事は、イースター、復活祭です。けれども、日本の教科書でも似たように書かれていたのを思い出しますね。イエスがキリスト教の創始者ですが、復活は書かれていません。いろんな知識のおありな？イケ○ミ・ア×ラさんは、「イエスは復活したのではないか？と思った弟子たちが、後でキリスト教を作った。」としています。復活を頑として事実として受け入れないのです。それは、人間によるものだと言いたいからです。

それから、「また教えられたのでもありません」とも言っています。ユダヤ教には、先祖からの言い伝えがありました。律法を守るために、その守るための枠組みを教えていく口伝律法がありました。例えば、安息日で「仕事をしてはならない」というものは具体的に、何をすることであるかということで、教師たちが教えていたものがありました。ですから、例えば床を担いで歩くことは働くことだとされていたので、イエス様が安息日に足なえた者を起き上がらせ、床を担いで歩かせたら彼らは、怒ったのです。人の教えを教えとしていると、イザヤの預言を引用しながら、イエス様も指摘さ

れました。ユダヤ主義者らは、ユダヤ教と同じような考え方で、人から伝えられたものなのだと、割礼やその他の律法を異邦人に強いるようにしました。キリスト教会にも、必ずしも聖書に書かれていないことを、同じ権威をもって教えている過ちを犯すこととなります。聖書こそが、私たちの生活と信仰の規範であります。

さて、「また教えられたのでもありません」ということについて、巷では、今のキリスト教がオリジナルから離れていて、それはパウロによって歪められたのだ、とする意見がたくさんあります。一般の論文やエッセイを紹介します。「イエスの教えをその反対のものへとことごとく歪めてしまったパウロが、そして、キリスト教会が鋭く攻撃されることになるのである。¹」「キリスト教とは？パウロが咀嚼して、理解した、再構築した「パウロ教」という新興宗教なのである。では？本当のキリスト教とは？それが4福音書だけである。²」そして、田川健三という人が、「イエスという男」という本を書きました。彼は、神は人間の創造物であり、神を信じないクリスチャンが真のクリスチャンだと言っています。彼は新約聖書の学者なのだそうですが、「神を信じないクリスチャン」なのだそうです。人間としてのイエスを信じるのだそうです。

なぜ、こんなことをするのか？という、パウロをオリジナルから切り離すことによって、イエスは遠いどこかの預言者であって、我々日本人には関係のない人物にできるからです。パウロの働きによって、ユダヤ人だけでなく、異邦人もだれでも、信じる者が救われる福音が広がったからです。パウロがいたから、今の日本人にも救いをもたらす福音になってしまったから、厄介なのです。ユダヤ教の中のイエスにしておけば、その心配がないからです。

そして、「ただイエス・キリストの啓示によって受けた」と言っていますが、「啓示」というのは元々の意味は「覆いを取り除かれる」という意味です。これまで隠されていたものが明らかにされる、露わにされるということです。パウロは律法に精通し、律法に熱心な者でありましたが、彼の目にはキリストの栄光が隠されていました。ところが、復活の主イエスご自身が会ってくださり、彼はこの方こそが律法と預言者の成就であることが明らかにされたのです。パウロは、福音を論じている時に何度も、先祖たちが神の約束として待ち望んでいたものが、成就したのだと訴えていました（使徒 13:23 等）。

2B ユダヤ教に進んだ者への恵み 13-17

パウロは次に、自分がどのようにして回心したかを話します。人から来たのだ、人に教えてもらったのだとする者たちに対して、「いや、神が私をこれだけ変えたのだ。」と反論しています。人から来た、人に教えてもらったということで、どうしてこんなに 180 度変えられるのか？その恵みは、神からのものだとしなければ、到底、説明ができず、辻褄が合わないのがパウロの回心です。

¹ https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/record/688/files/Humanities_H33-01.pdf

² <https://ncode.syosetu.com/n8325ff/>

¹³ ユダヤ教のうちにあった、かつての私の生き方を、あなたがたはすでに聞いています。私は激しく神の教会を迫害し、それを滅ぼそうとしました。

パウロは、ガラテヤの人々に既に話していました。神の教会の迫害者であったということです。パウロが使徒たちから教えを受けたとするユダヤ主義者に対して、そんなことは全くなく、むしろ、エルサレムやユダヤの教会の者たちは、パウロについて非常に恐れている、彼に近づかなかったということです(使徒 9:26 参照)。

ところで、なぜ宗教に熱心な者がこのような迫害者になるのでしょうか？ イエス様は弟子たちに、こう言われました。「ヨハネ 16:2-3 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。3 彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。」熱心であれば、それだけ神に仕えていると思って、迫害します。真逆になるのです。そしてパウロは、「ロマ 10:2-3 私は、彼らが神に対して熱心であることを証しますが、その熱心は知識に基づくものではありません。3 彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。」と言いました。義は神のもので、自分自身の義ではないということを知らなかったのです。自分の義を立てようとするから、自分が神の肩代わりになっているのだと思ってしまい、それで迫害者となっていきます。キリスト者として、熱心な人たちがかえって、みこころを損なうようなことを行う場合があります。それは、いつの間にか、神の義を、その熱心さから、いつの間にか自分自身の義に変えてしまっているからです。

そしてもう一つ、パウロのような迫害者の良心が、痛んでいるからです。「使徒 26:14b サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。」彼は、ステパノの説教と証しが、自分の心に突き刺さりました。ステパノを石打にしたことに彼は同意し、彼の説教を聞いてから、激しい迫害に走り出しました。それは、牛がとげの付いた棒を蹴るのと似ています。牛が後ろに脚を蹴るのを防ぐために、蹴ると突き刺さる棒を付けます。蹴れば蹴るほど、自分を痛めるのです。パウロは、迫害することによって、実は自分の良心を痛めていたのです。

いずれにしろ、パウロが迫害者であったのに、福音宣教者になっています。これが、神によるものでなければ、神の恵みによるものでなければ、この変化をどうやって説明できるでしょうか？ 変えられた人生が、神が、イエス・キリストが直接、ご介入されたことを示す証しです。私たちも、人から教えられたことで、人のものによって、どうして変えられたのでしょうか？ そうではないですね、人からのものに力はありません。御霊によって、イエス・キリストが示されたから、変えられました。

¹⁴ また私は、自分の同胞で同じ世代の多くの人に比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖の伝承に人一倍熱心でした。

もう一つのユダヤ主義者に対する反論は、彼は律法について教わらなければいけないような人ではなく、ユダヤ教については同胞で同じ世代の多くの人に比べたら、はるかに進んでいたということです。そして、書かれたトーラ、モーセの律法だけでなく「先祖の伝承」、つまり口伝律法にも人一倍熱心でした。午前礼拝で学んだように、彼は、エルサレムにおいてガマリエルという、当時、高名な学者の下で律法を学びました(使徒 22:3)。そして彼はユダヤ教で最も厳格で、先祖の伝承にも熱心であったパリサイ派出身です。偽教師たちが律法をふりかざして、それを守らなければいけないと言っていたところが、もしそんなことを言うならパウロこそが、その道を突き進んでいた第一人者なのです。

前回もお話しましたが、律法をきちんと守っていないからこそ、律法をふりかざすことができます。他の人に強要することができます。律法をまともに受け止めた人であれば、到底、負いきれないことは分かっているはずです。ペテロは、異邦人に律法を守らせようとする人々に、こう言いました。「使 15:10 そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかったくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか。」律法は、負いきれないものであることを知っています。そう言っているペテロも、失敗してしまいました。ガラテヤ 2 章で、パウロが、ペテロが、食事をしている時に異邦人から離れるためにその場を出て行ったので、人々のいる前でこう言ったのです。「2:14 あなた自身、ユダヤ人でありながら、ユダヤ人ではなく異邦人のように生活しているのならば、どうして異邦人に、ユダヤ人のように生活することを強いるのですか。」恵みによって救われた者たちが、恵みのうちに留まることが、いかに難しいかをよく示しています。

律法は守ることのできないことは、パウロは、人一倍、ユダヤ教に熱心だったからこそ知っていました。パウロは、律法を熱心に守り行うことで、自分が義を達成することが、律法の目的ではなくて、神のみが義であることを知りました。そして、その律法の要求を満たす方キリストが来られることを示していることを知りました。キリストが律法の中に証しされています。律法は、違反者には死を要求しますが、この方が死なれたことによってその要求も満たされたのです。

¹⁵しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、^{16a}異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき、

「しかし」から始まります。キリストの恵みによる、神の召しは、この「しかし」を生み出します。パウロの人生に、180 度の変化をもたらしました。同じように、私たちの人生にも、神は、キリストの恵みによって、「しかし」をもたらしてください。

母の胎にある時から選び出してくださいということ、これが自分の行いではなく、神の恵みであることがわかります。自分が善悪を知らないうちに選ばれているのですから。しかも、パウロが迫害をしている最中に、復活のイエス様はパウロに会ってくださいました。そして、バプテスマを授

けるように命じられた、キリストの弟子アナニアに、こう言われるのです。「使 9:15 行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」彼が悪を行っている時に、すでに、イエスの御名を宣べ伝えるのに、選ばれた器と宣言されました。これが恵みです。何も良いことを行う前から、神が選ばれるのです。

主がアナニアに伝えられたように、パウロは、「異邦人の間に御子の福音を伝える」ようにされました。異邦人への福音が、ユダヤ人の中では最も受け入れがたいことでありました。ユダヤ人だからこそ、救われると彼らは信じていたからです。だから異邦人はユダヤ人にならないといけな、つまり、ユダヤ教に改宗しなければならないとしていました。パウロがエルサレムで騒動になった時に、その人々に証しました。人々は静まって聞いていましたが、イエス様が彼に、「行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす。」と言われた言葉を分かち合いました(使徒 22:21)。それで、人々は声を張り上げて、「こんな男は、地上から覗いてしまえ。生かしておくべきではない。」と叫んだのです(22:22)。

まず、旧約聖書の中に、律法と預言書の中に、異邦人への救いは証されています。イスラエルは、世界に対する光として召されており、最終的には異邦人自身が神の救いを得ることが証されています。ユダヤ教の中で、ユダヤ人だからこそ救われるというのは、こうした、神の証しとはずれていました。そして、人がとことんまで義に達成できないことを知っていなかったということがあります。イスラエルが、約束の地に入って以来、神に背き続けて、ついにバビロンによって捕え移される、約束の地から引き抜かれる時に、神がエレミヤに、新しい契約を与えられたのです。律法を守り行うという従順によるのではなく、御霊によって、律法が心に書き記されるという約束を与えられました。ですから、割礼を受ける、律法を守るということを超えて、ただ、神が心を清めてくださり、ご自分と関係を結んでくださるという契約に改めてくださったのです。

ですから、そこにはユダヤ人も異邦人も差別がありません。神のことばを聞いて、福音を聞いて、それを聞いて信じるということについては、ユダヤ人だけでなく異邦人もできることなのです。律法とはかかわりなくできることなのです。ペテロが、ローマの百人隊長コルネリウスの回心を見て、そのことを確信しました。「私たちと彼ら(異邦人)の間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。(使徒 15:9)」人の義ではなく、神の義が恵みによって与えられるということは、ユダヤ人だけではなく、異邦人にも救いをもたらされた理由です。

^{16b} 私は血肉に相談することをせず、¹⁷ 私より先に使徒となった人たちに会うためにエルサレムに上ることもせず、すぐにアラビアに出て行き、再びダマスコに戻りました。

パウロは、「御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき」に、「血肉に相談すること」をしなかったと言っています。これは、人間的な解釈を加えたり、人間的にいじることはしなかった、とい

うことです。御子が明らかにされた、その霊的な啓示は、そのまま純粋に保存することが、今、必要であることを知りました。私たちキリストを信じる者たちも、「ヨハ 1:13 血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」とあります。私たちがイエス様に出会って、そのことを人間的に、これまでの経験で説明することができませんね。ただ、「私は、主を見た。」としか言えないのです。

そして、「私より先に使徒となった人たちに会うためにエルサレムに上ることも」しなかった、と言っています。ユダヤ主義者らが、パウロについて言いふらしていたのとは違って、パウロは、他の使徒たちのところについて、教えを聞いていたということにはなかったのです。パウロが使徒たちに会う時には、あくまでも、同じイエス・キリストの啓示が与えられていた仲間として、交わりとしてあったのであり、彼らの教えを聞いたからではなかったのです。私たちはもちろん、使徒ではないですから、彼らの受けた啓示と、私たちの受けている示しは違います。けれども、聖霊によって、それぞれに主が真理を示されて、それを握っているからこそ、私たちは主イエス・キリストにある一致を持つことができます。「 I ヨハ 2:20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。」

そして、「すぐにアラビアに出て行き、再びダマスコに戻りました」と言っています。ダマスコはシリアにあります。シリアの下にはアラビアが広がっています。今、サウジアラビアという国がありますが、「アラビアのロレンス」という映画があるように、シリアの南にあるヨルダンも、アラビア地方の中に入っていました。そこには当時、ナバタイ王国というアラビア人の大きな国がありました。かの有名な世界遺産、ペトラがその首都です。パウロは、ペトラまで行った可能性がありますね。彼は、御子の啓示がとんでもなく重要であることを知ったので、このことを、自分の聖書の知識の中で、思い巡らして、心に温めていたのかもしれません。

ところで、コリント第二 11 章の最後に、興味深いことを、パウロは書いています。「11:32-33 ダマスコでアレタ王の代官が、私を捕らえようとしてダマスコの人たちの町を見張りましたが、33 私は窓からかごで城壁伝いに降りられ、彼の手を逃れたのでした。」ユダヤ人が、パウロを殺害しようとしていましたが、アレタ王の代官もその要請にしたがって実行しようとしていた可能性があります。アレタ王とは、ナバタイ王国のアレタス四世のことです。ペトラの遺跡で、最も有名なのが「宝物殿」と呼ばれるものですが、それはアレタス四世の墳墓ではないか？とも言われています。ナバタイ王国は実に、シリアのダマスコにまで支配を当時、広げていたことが分かります。そしてアレタ王の代官は、アラビアに来ていたパウロのことは、良く思っていなかったのかもしれません。

3B 使徒たちに会わなかった訪問 18-24

¹⁸ それから三年後に、私はケファを訪ねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。

¹⁹ しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒たちにはだれにも会いませんでした。²⁰ 神の御

前で言いますが、私があなたがたに書いていることに偽りはありません。

使徒の働き 9 章 23 節に、ダマスコにいたパウロを、ユダヤ人たちが殺そうとしていることが書かれています。「かなりの日数がたち」とありますから、これが三年のことではないかと思えます。この部分をちょっと読んでみましょう。26-28 節です。

9:26 エルサレムに着いて、サウロは弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れていた。27 しかし、バルナバはサウロを引き受けて、使徒たちのところに連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に語られたこと、また彼がダマスコでイエスの名によって大胆に語った様子を彼らに説明した。28 サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の御名によって大胆に語った。

使徒の働きを書いたルカは、サウロ、つまりパウロが、使徒たちのところに連れて行かれた。また、使徒たちと自由に行き来していたと言っています。けれども、パウロは、ケファ、つまり、ペテロのところに十五日間滞在して、他に、主の兄弟ヤコブに会っただけで、他の使徒たちには誰も会っていない、と言っています。矛盾しているように聞こえますが、おそらく、ペテロとヤコブは、使徒たちの中で代表的な指導者であり、この二人のところに連れて来られて、二人とは会っていたということでしょう。そしてペテロの家の中に滞在して、自由に行き来していたのでしょう。ルカは二人の代表的な指導者を、「使徒たち」と一般的な言葉で言っているのだと思います。

大事なのは、ここで、ペテロやヤコブからも、何か教えを受けるために来たのではないということです。あくまでも「訪問」に来ただけです。

²¹ それから、私はシリアおよびキリキアの地方に行きました。

使徒の働き 9 章によると、パウロがエルサレムにいた時に、ギリシア語を話すユダヤ人に福音を語っていたのですが、それで、彼らはパウロを殺そうと思いました。それを知った兄弟たちが、パウロをカイサリアに連れて行った、とあります(30 節)。さらに北上すれば、そこがシリアです。アンティオキアがある地方です。そして、その西に進むと、キリキア属州です。そこにタルソがあります。

²² それで私は、キリストにあるユダヤの諸教会には顔を知られることはありませんでした。²³ ただ、人々は、「以前私たちを迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている」と聞いて、²⁴ 私のことで神をあがめていました。

パウロは、エルサレムにわずかな使徒たちに会っただけで、ユダヤ地方全体の諸教会には顔を知られていませんでした。ただ、彼らの中でパウロの語っている福音が、自分たちと同じ福音で

あるという前提がありました。「以前私たちを迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている」と言っています。そして彼らは神をあがめています。つまり、そこにある神の恵みを彼らは知ったからです。これがユダヤ主義者らの反応とは正反対です。神の恵みを知っている者たちは、自分の知らぬその知らせについて、妬みや無関心になることはできず、神の恵みに感動して、神をほめたたえるはずです。

こうして、恵みの福音にある喜びと自由があるのに対して、人から来たもの、人に教えられた者に縛られる偽の教えとの対比がありました。パウロが、イエス・キリストの啓示に忠実であったからこそ、御霊による働きが続いているので、それを人によるもの、人に教えられるものに縛れることで、恵みを台無しにしてしまいます。私たちが、聖霊によって心に示されたキリストの真理を、大事にしていきたいと思います。

今回は、その偽の兄弟たちとの、一步も譲らない戦いについて、パウロは思い起こしながら書いているところを読んでいます。